

片岡直温の政治家像

——選挙遍歴、実業界との関係を中心に——

大杉 勇喜
(玉井研究会 4年)

序 文

I 実業界での活躍

- 1 官僚時代と実業家への転身
- 2 高知からの出馬と選挙干渉
- 3 生命保険業と大阪からの出馬

II 選挙区と所属政党の変遷

- 1 選挙区の変遷
- 2 所属政党の変遷

III 政界復帰と公職の歴任

- 1 落選と復帰
- 2 公職の歴任
- 3 政治力の凋落と晩年

結 語

序 文

本論文は、戦前日本において活躍した政党政治家である片岡直温について論じるものである。

近代日本政治史上、片岡直温が注目されるのは、彼が大蔵大臣在任中の昭和2(1927)年に、金融恐慌が起こる引き金となった帝国議会における「失言」についてである。昭和2(1927)年3月14日、衆議院予算委員会において、当時破綻していなかったにもかかわらず、「今日昼頃渡辺銀行が破綻しました」と発言し

たことによって¹⁾、片岡は金融恐慌を引き起こした張本人として強い批判を浴びることとなった。

片岡直温について今日一般的に知られている事柄は、この一件にほぼ限られているといってもよい。それゆえ、政治家としてのその他の功績については、これまで十分に考察されてきたとは言い難い。片岡は30年以上にわたる政治家としてのキャリアの中で、立憲国民党、立憲同志会、憲政会、立憲民政党に所属し、その設立や運営に深く関与した。片岡は当時の党幹部と協力しながら党の発展を支え、超然内閣に拒絶の姿勢を示しつつ政党政治を推進した。また、実業家の才にも恵まれ、日本生命保険会社社長を務めるなど、日本の保険業界の創成期にも大きな影響を与えた。その後は、保険業界のみならず、鉄道事業、ホテル事業などにも乗り出し、大きな成功を収めている。

本論文では、片岡が最晩年に書き残した2巻の回想録、当時の新聞、片岡が関与した会社の社史などを調査することで、片岡の政治家としての歩みを追う。特に、その特徴的な選挙遍歴や選挙活動の内実、中央政界における動向、実業界との関係などを中心に確認することで、片岡の政治家像を捉えていきたい。

I 実業界での活躍

本章では、片岡が高知において誕生して以降、官僚時代を経て、実業家としてどのような活躍をし、その後どのように政治に関わるようになったのかについて概観する。第1節では、片岡が故郷においてどのように政治に関与し始め、官僚そして実業家への道を歩んでいったのかについて確認する。第2節では、政府による選挙干渉と片岡の関係について述べる。第3節では、政治家への転身後の活動、そして実業家としてどのように成功を収めていったのかを中心に述べていく。

1 官僚時代と実業家への転身

片岡直温は安政6(1859)年、土佐藩にて片岡直英の次男として生まれた。当時の土佐藩は参政の吉田東洋らが公武合体論によって藩内の尊王攘夷派を抑圧していた。父・直英も尊王攘夷派で藩主・山内容堂に建議をしたために藩の忌諱に触れ、藩吏の監視や迫害を受ける家柄になってしまい、幼少期の直温は兄・直輝とともに極貧生活を送った²⁾。古着商などで学費を稼いだ片岡は、明治8(1875)年に高知陶治学校³⁾に入学し、翌年には姫野々小学校の1等授業生⁴⁾に抜擢され

た。明治13（1880）年には教職を辞職し、高岡郡役人、同郡書記を務めた⁵⁾。

明治13（1880）年以降、高知県内では急進的自由主義や民定憲法制定を主張する自由派と、君主制や欽定憲法制定など保守的な主張をする国民派の対立が激化していた。片岡は一貫して後者の国民派に属し、国民派系の政治団体である猶興社の幹事などを務め、積極的に政治活動に参加した。片岡の郷里の高岡郡は国民派の影響力の強い地域で、片岡が国民派に所属したのも自然な成り行きであったものと思われる。

その後、片岡は高岡郡半山郷十三箇村連合村会議員、同会議長などを歴任し、明治14（1881）年には高知県令・田邊輝実の自由派に偏重した県政を改革すべく、地元有志を代表して陳情のため上京した。片岡は高知出身の佐々木高行、土方久元らと会見ののち、内務省の田邊良顕警保局長や当時明治政府指導者の1人であった伊藤博文に直談判を試み、立志社をはじめとする高知県下の自由派による行政の問題点を説き、政府による対応を求めた。内務卿の松方正義の仲介もあって、片岡ら国民派の意見は受け入れられ、後日、高知県令の田邊輝実は更迭された⁶⁾。伊藤や松方は、片岡の陳情に先立ち佐々木や土方から高知県の自由民権派の様子については報告を受けており、近いうちに相当の処置をとるつもりであったという⁷⁾。いずれにしても、これは片岡にとって政治を動かした初めての経験であり、同時に片岡が官界へと進む契機ともなった。この一件で片岡は伊藤に高く評価され⁸⁾、明治14（1881）年12月には当時内務卿の地位にあった伊藤の強い意向によって内務省に入省することとなったのである。このように、明治20（1887）年に官僚の資格任用制度が導入される以前には、各省官吏の登用については伊藤を含む有力政治家による情実任用が一般的であった。その後、伊藤は立憲制度調査のため洋行し、官僚制度については大学卒業生による官吏任用や試験制度の採用の必要性を認識するようになった⁹⁾。片岡の入省はこの洋行のわずか4か月前のことであり、さらに当時井上毅が情実や地縁による人事に対する批判を展開し¹⁰⁾、その影響で民党勢力においても情実任用の打破が主張され始めていたことなどを考慮すると¹¹⁾、片岡がこの時期までに伊藤と知己を得ることができたのは幸運なことであった。明治15（1882）年には、片岡の内務省への入省に反対して政治運動への参加を勧めていた谷干城（高知出身）の勧誘を受け¹²⁾、片岡は福地源一郎らの立憲帝政党の設立に協力した¹³⁾。官僚となった後においても、政治運動に対して人一倍強い思いを抱いていたことがうかがえる。また明治31（1898）年には、渋沢栄一を中心に作られた地租増徴期成同盟会に片岡、福地は

ともに参加し、運動方針の決定に際して協力している¹⁴⁾。

その後片岡は立憲帝政党の運動から離れ、官界に戻った。佐々木高行（高知出身）の紹介で工部省の中井弘と知り合い、中井の勧誘で片岡は工部省に出仕することになったのである¹⁵⁾。中井は薩摩藩出身であったが、安政年間に脱藩して以降は土佐に身を置き、慶應2（1866）年には土佐藩の資金援助を受けて英国渡航を果たすという経歴を持っていた¹⁶⁾。明治17（1884）年10月、滋賀県令に就任した中井に従って、片岡は滋賀県1等属として県庁に入庁した。片岡は県庁内に官尊民卑の気風があることを感じ、その改革に取り組んだ。当初は衛生課長として病院改革などに取り組んだが、片岡の改革手法に反発する一派を退けた後は庶務課長など4課長を兼任し¹⁷⁾、中井県令を補佐した。また、県庁内の新規程の策定やその施行にも尽力した。新規程の施行に反対する勢力の動きを中井が懸念して施行を躊躇する姿勢をとった際にも、片岡は中井の同意を得て中井を京都へ出張させ、自らが県令代理となって施行を主導した¹⁸⁾。このような、やや強引で軽率とも言える政治手法は、後々まで片岡自身の人望を失わせることになるのだが、豪快、積極果敢といった長所と裏腹の関係にあったことも事実であった。明治19（1886）年6月には警部長に昇任した。警部長は現在の県警本部長にあたる役職で、特別な学歴や血筋も持たない片岡にとっては大出世であり、壮士の取り締まりや県庁舎新築などに貢献した。また、官尊民卑の風習を打破するべく、民衆に寄り添った警察行政を指導した。さらに、巡査教習所に英語科を設けた際には、自らも机を並べ授業を受けたという¹⁹⁾。一方で、日本中の新聞を県庁に集めようとした際に、予算がないと部下に断られた時には「そんなことでは警務長は勤まらない」と怒鳴りつけるなどし、新聞からは「大警視気取り」と揶揄されてもいる²⁰⁾。その後、役人としての生活が形式的で規則尽くめであることに徐々に嫌気がさし始め、政治活動に備えるため、片岡は明治22（1889）年に滋賀県庁を退官することを決意する²¹⁾。

同年、大日本帝国憲法が公布されたことで政界は1つの区切りを迎えていた。一方で、実業界はいまだに発展途上の段階にあり、多くの課題が山積していたと同時に、さらなる飛躍の好機にも恵まれていた。そのような中で、当時滋賀県政財界の重鎮であった弘世助三郎は、新たに生命保険事業を興す計画を立てていた。そこで、長年の恩人であった中井の紹介もあって、片岡はその経営実務にあたることとなった。明治22（1889）年7月、片岡は大阪にて創立された日本生命保険会社の初代副社長に就任した。社長には鴻池善右衛門を迎えたが、創立趣意書、

保険規則、の作成を主導するなど、創立とその後の経営において片岡は中心的な役割を果たした。官僚時代には周囲の反発を招くことの多かった片岡の積極果敢な性格も、この頃には存分に活かされるようになっていた。片岡は生命保険事業の宣伝、代理店の増設など、保険加入者の拡大に尽力した。その結果、日本生命は創立からわずか10年間で、当時東京において生命保険業を手掛けていた明治生命、帝国生命（現在の朝日生命）の業績を凌ぐ契約高を誇るようになった²²⁾。こうして、片岡は華々しく実業家としての道を歩み始めたのである。

2 高知からの出馬と選挙干渉

片岡が日本生命の副社長に就任した翌年の明治23（1890）年、第1回衆議院議員総選挙が行われ、表1に示す通り、片岡は郷里の高岡郡が位置する高知2区（定数2）から立候補した。このときは落選したものの²³⁾、続く第2回総選挙で片岡は初当選を果たし、政治家に転身した。この第2回総選挙は、品川弥二郎内務大臣による選挙干渉が大規模に行われたことで有名であるが、このことは片岡が立候補した高知においても大きく影響していた。前述したように、当時の高知では、板垣退党を中心に自由民権運動を推進する自由派と、土佐勤王党の流れを汲み自由派と対立した国民派の衝突が激化していた。自由民権運動の発祥地である高知は、このように政治意識の高い土地柄であり、県内の各村落は政治的に同一の党派で構成されているという特徴を持っていた²⁴⁾。第1回総選挙の前哨戦とされた県議会議員選挙の際にも自由派と国民派の激しい衝突が起り、死傷者を出すほどであった²⁵⁾。第2回総選挙では、こうした事情に加え、全国規模で選挙干渉が行われ、とりわけ高知県の激烈さは全国随一とされた。県内の警察官は治安維持にかかわる職務を事実上放棄し²⁶⁾、片岡を含む国民派候補の当選に向けて積極的に選挙戦に介入した。1区と3区は自由派支持票が多数であることが前回の総選挙で明らかであったため、2区（定数2）の林有造・片岡健吉（いずれも自由派）を倒す事に政府側の目標がおかれ、干渉が最も積極的に行われた。片岡の郷里の高岡郡があった関係から、この高知2区で立候補していた片岡は、政府が支援する国民派の一員として選挙を戦い、当選したのである²⁷⁾。

初当選後、片岡にとって初めての議会演説は、民党から提出された選挙干渉に関する緊急決議案に対する反対演説であった。この演説は2日間にわたって行われるほどの長演説で、高知県の選挙において死傷者を多く出したのは政府による干渉のせいではなく、自由派と国民派の対立（明治維新当時の勤王派、佐幕派の対

表1 片岡直温の選挙歴一覧表

回数	年	選挙区	所属	当落	順位
第1回	1890(明治23)年	高知2区	国民自由党	落選	4位
第2回	1892(明治25)年	高知2区	国民自由党	当選無効	1位→3位*
第3回	1894(明治27)年	高知2区	国民協会	落選	3位
第4回	1894(明治27)年	高知2区	立憲自由党	落選	3位
第5回	1898(明治31)年	大阪2区	山下倶楽部	当選	1位
第6回	1898(明治31)年	大阪2区	実業同士倶楽部	落選	2位
第10回	1908(明治41)年	三重郡部	無所属	当選	2位
第11回	1912(大正元)年	高知郡部	立憲国民党	当選	1位
第12回	1915(大正4)年	京都郡部	立憲同志会	当選	1位
第13回	1917(大正6)年	京都郡部	憲政会	当選	1位
第14回	1920(大正9)年	高知4区	憲政会	落選	2位
第15回	1924(大正13)年	京都2区	憲政会	当選	1位
第16回	1928(昭和3)年	京都1区	立憲民政党	当選	1位
第17回	1930(昭和5)年	京都1区	立憲民政党	落選	6位

* 大審院の判決により、片岡の順位は3位となり当選無効となった。

立)から始まっていることを土佐の歴史に則して述べ、政府による選挙干渉を擁護した²⁸⁾。演説後、当時貴族院議員であった西園寺公望からは「選挙干渉の卵」と揶揄されたという²⁹⁾。こうして、片岡など政府による選挙干渉によって当選した議員たちは「吏党」と呼ばれ、悪評を買うことになった。

自由民権運動発祥の地である高知において、吏党から立候補したことは地元でも評判を落とした。また、憲法中止論さえ主張した品川内務大臣に呼応した態度も批判的となった。加えて、死傷者を多く出したにもかかわらず、その後の後始末を顧みなかったことで、片岡のために行動した地元の人々からも悪評を買ったという³⁰⁾。

その後、開票に不正があったとする自由党の告発が大審院により認められ、票の再集計が行われた結果、片岡健吉の票が片岡直温に流れたことが認定された。その結果、明治26(1893)年6月に片岡の当選は無効となり³¹⁾、片岡はわずか1年余りで政治家生活を終えることとなった。

明治27（1894）年3月の第3回総選挙でも、片岡は高知2区（定数2）で国民協会（史党）から立候補したが、林、片岡健吉に2倍以上の票差をつけられ大敗した³²⁾。第4回総選挙では、当初は地租の軽減を目指す一派の中から大阪4区で片岡を擁立しようとする動きがあった。しかし当時、大阪紡績をはじめとする紡績業界によって綿花輸入税・綿糸輸出税の廃止を主張する両税廃止運動が展開されており、片岡は綿花輸入税の免除を主張していたため、綿花農家を中心に農業界との衝突が予想され、農地を多く持つ地租軽減派からの擁立は見送られた³³⁾。結局、再び地元高知2区（定数2）で、しかも嫌悪していたはずの自由派である立憲自由党から出馬したものの、従来の民党候補に大敗した³⁴⁾。片岡が自由派から出馬した理由については明確ではないが、定数2の選挙区に自由派から林有造、片岡健吉の2名、国民派から弘田正郎、安岡雄吉の2名が出馬していることを考慮すると、片岡は事実上の中立候補であった可能性が高いと思われる。

3 生命保険業と大阪からの出馬

明治31（1898）年3月に行われた第5回総選挙で、片岡は地元高知を離れ大阪2区（定数1）から立候補した。片岡が選挙干渉によって当選した第2回総選挙以来、この時すでに約6年が経過していたものの、地元高知の自由党からは「憲政の罪人」と片岡を批判する決議がなされるなど³⁵⁾、地元高知での片岡の評判は芳しくなく、高知から立候補しても当選する見込みがなかったことが選挙区を移した主な理由と思われる。

片岡は日本生命の創立に関わった後も、日本海陸保険会社副社長（のちに社長）、日本共同銀行頭取、後年には日本傷害保険株式会社相談役などを務め³⁶⁾、また兄・直輝も日銀大阪支店長、大阪瓦斯社長などを務めるなど関西財界に大きな影響力を保持していた³⁷⁾。こうした関係で、片岡は実業界方面で支持基盤を固めやすい大阪を新たな選挙区として選んだ。片岡はこれ以降、三重、京都へと選挙区を移すことになるが、いずれも自身が経営に関わった企業の拠点のある地域であり、片岡にとってこの選挙は、実業家の立場に基づいて築いた地盤のもとに選挙を戦う最初の例となった。

このように、やむを得ず地元を離れ、実業界を支持基盤として大阪で選挙を戦うことを決めた片岡であったが、その選挙戦は決して楽なものではなかった。実業界に広い人脈を持ち、片岡とも親交のあった井上馨と対立する伊東巳代治が、井上や片岡とも関係の深い藤田伝三郎などの株式仲間に対し、片岡と対立する菊

池侃二陣営に味方するよう働きかけたため、実業団体は分裂の憂き目に遭ったのである³⁸⁾。菊池は弁護士出身で自由民権運動への参加経験を持っており、主に政界方面に支持基盤を有していた。片岡、菊池両陣営は猛烈な競争を行い、共に多大の財を投じたという³⁹⁾。その過激さゆえ、選挙戦は警戒態勢のもとに行われ、片岡の選挙人は1群ずつ巡査に保護されながら選挙場へ向かうほどだった⁴⁰⁾。片岡はこの選挙で菊池を破り⁴¹⁾、選挙干渉によって当選無効となった明治26 (1893) 年以来、約5年ぶりに衆議院議員に返り咲いた。

当選後は衆議院内会派の山下倶楽部に所属し⁴²⁾、日清戦争による戦争景気の反動を受けて苦しんでいた大阪の商工業救済問題の解決のため奔走した。井上馨大蔵大臣の承諾を得た片岡は、日本勧業銀行の河島醇総裁や大阪の日銀支店長であった兄・直輝とも協議しながら、日銀の公債買取りと勸銀による融資を実現し、大阪の商工業救済に尽力した⁴³⁾。また、日清戦争後の財政問題については、地租増徴の必要性を説き、公債の増発を戒める堅実な財政を主張した⁴⁴⁾。

しかし同年8月に行われた第6回総選挙において大阪2区(定数1)から実業同士の倶楽部⁴⁵⁾公認で立候補するも、憲政党候補の伊藤徳三に大差をつけられ惨敗した⁴⁶⁾。この間の片岡の政治家生活はわずか4か月足らずであった。

これ以後、片岡は政治活動からは身を引き、実業家としての活動に専念するようになる。明治36 (1903) 年に日本生命の鴻池社長が退任すると、片岡は社長職を引き継ぎ、日本生命の業績拡大に邁進した。明治39 (1906) 年には、第5回万国保険学会議に出席するため欧米を訪問し、保険事業やホテル事業に関する認識を深めた⁴⁷⁾。のちに片岡はドイツのベルリン万国保険学会名誉副議長を歴任するなど、日本における生命保険業界の第一人者としての地位を築き上げるに至った。片岡は他にも、日本倉庫株式会社、熊本紡績会社、久留米紡績会社など多くの企業経営に関与することで経営手腕を発揮し、特に大阪を中心とする関西実業界において重きをなしていった。

片岡はこの間、明治33 (1900) 年には伊藤博文から立憲政友会結成に協力するよう依頼されたり⁴⁸⁾、明治35 (1902) 年の第7回総選挙では大阪銀行界から候補者として擁立する動きもあったりしたが⁴⁹⁾、いずれも実業家としての活動に専念したいことを理由に固辞している。このように、実業界における成功とは裏腹に、片岡の政治活動に対する思いは次第に冷めていった。

II 選挙区と所属政党の変遷

本章では、片岡が政治家人生の前半期（1908-1919年）において、どのように選挙区と所属政党を移動していったのかについて明らかにする。第1節では、選挙区の変遷について、政治活動と実業家としての仕事の関係を追いながら確認する。第2節では、所属政党の変遷について、片岡の具体的な政治行動とともに述べていく。

1 選挙区の変遷

政治家・片岡直温の最大の特徴は、その選挙遍歴にあるといってもよい。片岡は地元高知での悪評ぶりゆえに、第5回総選挙以降は大阪、三重、京都と選挙区を頻繁に移動した。また、その間に地元高知からも度々出馬している。前章において述べたように、高知を除く選挙区は、実業家として関与した企業に関わる地域を中心に選ばれている。したがって、片岡の選挙区の変遷には、彼の実業家としての活動の内容が大きく影響していた。本節では、片岡の選挙区の遍歴について、彼の実業家としての動向との関係を踏まえながら考察していく。

片岡が社長を務める日本生命の創業に関与した資本家たちは、関西における鉄道事業にも、株主や重役として関わっていた⁵⁰⁾。このような経緯から日本生命は鉄道金融にも携わるようになり、近畿地方の鉄道事業に対して一定の発言力を有していた。片岡も明治32(1899)年に河陽鉄道の経営再建に携わったのを皮切りに、参宮鉄道社長、関西鉄道社長、紀和鉄道社長を務めるなど関西を中心に鉄道事業にも乗り出し⁵¹⁾、同業界において大きな影響力を保持していた。特に、参宮鉄道は三重・宇治山田に路線を有し、関西鉄道の本社も三重に置かれていたため、片岡は鉄道事業を通して三重に深く関与することになった。

しかしこの頃、鉄道経営に携わっていた片岡にとって重大な問題が生じていた。陸軍を中心に軍事輸送効率化のため鉄道国有論が強く主張されるようになっていたのである。これに対して片岡は、財政負担の増大、既得権の侵害や官僚制の弊害などを理由に、九州鉄道社長の仙谷貢（高知出身）らとともに鉄道国有に対して徹底的な反対運動を展開した⁵²⁾。結局、明治39（1906）年に鉄道国有法が成立したことで、片岡は鉄道事業からは身を引くこととなったが、この経験が長く退いていた政界への思いを再燃させることとなった。こうして片岡は、三菱創業

者・岩崎弥太郎のいとこの豊川良平からの勧誘・支援もあって⁵³⁾、明治41 (1908)年の第10回総選挙に三重郡部 (定数7) から立候補する決意を固めたのである。

立候補の際の推薦状には、関西鉄道、参宮鉄道の名が連ねられ、長年三重を中心に鉄道産業を支えてきた実績を印象づけていた⁵⁴⁾。このとき、従来から三重を地盤に選挙を戦ってきた尾崎行雄や浜田国松ら既存の政治家にとって、それまで実業家に徹していた片岡の突然の立候補は予想外かつ衝撃的な事態であった。また、片岡は選挙戦当初から安濃、鈴鹿、員弁、南伊勢など南北を問わず広く地盤を固め、早期に当選を確実のものとしており⁵⁵⁾、総有権者数が48000であるのに対し、片岡が結果的に5600票もの票数を獲得していたことを考慮すると⁵⁶⁾、片岡の出馬が三重を地盤とする政治家たちの当落に少なからぬ影響を与えたことは想像に難くない。選挙中の片岡は、のちに片岡とともに国民党で「土佐派」として行動を共にする大石正巳 (高知出身) と津市で演説を行うなどした⁵⁷⁾。大石自身はこの選挙では高知郡部から出馬していたが、大石は憲政本党時代から犬養毅と対立しており、同郷の片岡から支持を受けていた経緯から、片岡の応援のために三重まで駆け付けたのである。また、片岡は鉄道事業を通して築いた地盤に加え、大石がかつて三重から出馬していた際の支持基盤も継承したという⁵⁸⁾。片岡は実業家出身らしく資金力も非常に強いことで知られており、当時の郡部における選挙費用の相場が約1万円、東京でも約3万円だったのに対し、片岡はこの選挙で約5万円もの選挙費用をかけたという⁵⁹⁾。このように莫大な選挙費用をかけて選挙を戦う手法は、後々まで片岡の常套となった。晩年、選挙と金について片岡は、貧乏な政治家が黄白の誘惑をうけて国家社会に害毒を流しているとし⁶⁰⁾、その轍を踏まないように自己の政治的独立を維持できるだけ資金の確保に努力しなければならなかったと回想している。片岡は無所属の落下傘候補であったにもかかわらず、立憲政友会の栗原亮一に次ぐ2位で当選し、約10年ぶりに政界に復帰した。

当選後片岡は、戊申倶楽部を経て立憲国民党の結成に参加した。片岡は大石、仙谷、富田幸次郎とともに国民党土佐派として知られ、国民党の中でも立場を異にする犬養派とは一線を画し、一貫して桂太郎内閣を支持した (後述)。明治45 (1912) 年に行われた第11回総選挙では、京都、大阪、三重に加え、その強い資金力ゆえに地元高知からも片岡に立候補を求める動きがあった⁶¹⁾。結局、片岡は地元・高知郡部 (定数5) から立候補することを決めた。片岡自身の回想によると、前回の総選挙は豊川の勧誘を受けての出馬であったため、鉄道問題をめ

ぐって協力が求められた豊川への配慮から鉄道事業の拠点である三重からの出馬を選んだが、この選挙は片岡自身の強い意志に基づいた出馬であったため、地元高知を選挙区として選んだのだという⁶²⁾。また、先述したように、この間に大石や仙谷ら高知出身の政治家たちと政治的な協力関係を強めていったことも少なからず関係しているものと思われる。片岡が最後に高知から立候補したのは10年以上前のことであったが、地元ではかつて片岡が選挙干渉を行って当選したことに対する強い反感が残っていた。国民党内からでさえ、片岡の擁立に反発した一派が弁護士の山口兼良を代わりに擁立すべしとの推薦状が出されるほどであった⁶³⁾。その中で片岡は「背徳主義の徒」、「金権派」と称され、資金力に任せた選挙手法が痛烈に批判されていた⁶⁴⁾。これには国民党本部も苦悩したが、結局山口は立候補を強行し、片岡派と山口派は互いに激しく攻撃しあった。片岡の演説中には、かつての選挙干渉について非難の声が多く上がるなど場内は騒然となり、片岡の釈明の声も届かないほどだったという⁶⁵⁾。それでも片岡は豊富な資金力を背景に戦いを有利に進めトップ当選を果たした⁶⁶⁾。一方、落選した山口の最終的な獲得票数は100票を下回っており、彼は選挙を戦うだけの十分な地盤を持っていなかったことがわかる。片岡は政治家人生の中で地元高知から計6回出馬しているが、選挙干渉で当選した第2回総選挙を除くと、当選した選挙はこの1回限りであった。この選挙は片岡が高知から出馬した選挙では唯一の大選挙区制下での選挙であり、第2回総選挙での選挙干渉で評判を落とした幡多郡、高岡郡、吾川郡以外の地域でも得票のチャンスがあったことが片岡の当選に結び付いたと思われる。

後述するように、片岡は当選後、国民党を脱党し桂新党となる立憲同志会の結成に参加した。大正3（1914）年には第2次大隈重信内閣が成立し、立憲同志会は与党となった。翌年に行われた第12回総選挙では、片岡は京都から立候補することを決めた。片岡と京都の関係は、片岡が関西鉄道社長を務めていた頃にまで遡る。片岡の関西鉄道社長時代、同鉄道は奈良ホテルの本館建設を請け負うことになる。奈良ホテルの運営を請け負っていたのは京都の都ホテルであったため、片岡は奈良ホテル建設のために都ホテルと連携することになる⁶⁷⁾。ちなみに、奈良ホテル本館の設計は、片岡の婚養子で直温の企業経営にも様々な場面で関与した片岡安と辰野金吾が設立した辰野片岡建築事務所が担うことになる。こうした経緯から、のちに都ホテルが再建を迫られた際に、西村仁兵衛社長の依頼で片岡が新社長に就任する。第1次世界大戦後の国際協調の風潮の中で観光産業が新た

な産業として注目されるようになると、京都も観光客誘致を推進し始め、片岡のホテル経営を後押しした。片岡が社長を務めた時代の都ホテルは、大正11 (1922) 年にイギリスのエドワード皇太子が宿泊するなど、日本を代表するホテルにまで発展していた⁶⁸⁾。さらに片岡は、都ホテルの経営を通じた観光産業の勃興を契機に、京都市に娯楽施設の充実や、道路や料理店の改善を要望するなど、京都経済の発展にも尽力した⁶⁹⁾。また、その後は京都電気鉄道会社 (京電) 相談役、京津電気軌道株式会社監査役なども歴任し、京都との繋がりを深めた。このように、片岡は京都に本拠地をおく会社に関与することで京都政財界にも通じ、京都における存在感を高めていった。大正5 (1916) 年に立憲同志会京都支部が開設された際には初代支部長に就任し、片岡は名実ともに京都を代表する政治家となった。さらに、大正2 (1913) 年に加藤高明、若槻礼次郎ら同志会幹部が京都を訪れた際には片岡の邸宅で食事が催されたり⁷⁰⁾、京都支部の発会式後の懇親会で都ホテルが利用されたりするなど、片岡と京都の繋がりは広く認知されるようになった。

明治43 (1910) 年には、京都の伏見桃山に現在の価値で数十億円をかけて別邸 (のちの本邸) を構えており、同年の京都府郡部代議士補欠選挙において片岡らが応援に入った際には協議場として提供されてもいる⁷¹⁾。また、明治天皇が桃山御陵に埋葬される際には、北白川宮家、竹田宮家の宿泊先としても用いられた。

片岡はこうした経緯から京都を自らの選挙区として選び、これ以降、大正9 (1920) 年の第14回総選挙を除いて、計5回 (第12回総選挙を含む) にわたって京都から立候補し続けることになる。片岡にとって初の京都での選挙となった第12回総選挙は、先述した別邸があった関係から、激戦区である郡部 (定数5) からの出馬となった。実業界に支持基盤を有している片岡にとっては、市部からの立候補が期待されたが、市部からは森田茂 (中正会)、渡邊昭 (国民党)、加藤小太郎 (同志会) など従来から地盤を有する政治家たちが既に出馬の意思を明確にしており、京都からは初出馬となる片岡が割り込むことは困難であったと思われる。それゆえ郡部からの出馬となったわけであるが、落下傘候補である片岡にとって1人で京都の地盤を固めることは容易ではなかった。そこで片岡は、京都府会議員を7期務め、同府会議長などを歴任し、京都に一定の地盤を持つ山口俊一 (立憲同志会) と共同で選挙事務所を開設することにより京都の地盤に食い込もうとする。同じ政党の所属とはいえ、大選挙区制下ではライバル同士でもある両者であったが、山口もそれまでの選挙では落選と当選を繰り返しており、地盤が必ず

しも強固ではなかったため、片岡と協力関係を結ぶことは山口陣営にとっても有利に働いたものと思われる。また、片岡は南山城や丹後といった地域を主地盤としたのに対し⁷²⁾、山口は郷里の天田郡に加え、何鹿郡や舞鶴などを従来の地盤としてきたため、両者の郡部地域における地盤のすみ分けが明確であったことも協力関係の構築を容易にした。片岡は、木津町において大正倶楽部という後援組織を作ったり、丹後で解散していた国民党の支部を手中に収めたりするなど、支援組織の拡充も進めた⁷³⁾。政策面では得意の経済について語ることが多く、行財政整理などを訴え、週に40回も演説を行うほどだったという。片岡は次点の中正会候補に1200票以上の大差をつけ、候補者中で唯一4000票以上を獲得しトップ当選を果たした⁷⁴⁾。また、当時の第2次大隈重信内閣への追い風もあって、京都郡部における定数5のうち、同志会と対立していた政友会は1人しか当選できておらず、非政友会の優位ぶりが確認できる。

続く第13回総選挙においても片岡は京都郡部（定数5）から立候補した。片岡が所属する憲政会自体は大敗したにもかかわらず、片岡自身は前回に引き続き唯一の4000票超えを達成し、トップで再選された。ちなみに、この選挙でも京都郡部からの政友会候補の当選は1人のみとなっている⁷⁵⁾。この選挙でも、片岡はやはり市部からの出馬を一時は検討していたようで⁷⁶⁾、将来的には市部からの出馬を目指していたことがうかがえる。

以上が第10回から第13回総選挙までの片岡の選挙区の変遷である。政治評論家の前田蓮山は、片岡ほど選挙区の定まらない政治家は見たことがなかったというので、昨今の選挙は金さえあれば足りると指摘し、故国を持たずに全世界の財界に雄飛するユダヤ人になぞらえ、片岡を「選挙界のユダヤ人」と称した⁷⁷⁾。また、実業家が本業で、政治家は副業もしくは実業家としての「利用機関」に過ぎず、政治を商業の1つと考える「政治商人」などと評されることもあったという⁷⁸⁾。少なくとも、この時期の片岡が政治活動と実業家としての仕事の両立に心を砕いていたことは事実で、党の役員などの就任要請に対しても、実業家として仕事が忙しいことを理由に複数回にわたって固辞している⁷⁹⁾。

2 所属政党の変遷

片岡は政治家人生の中で多くの政党の成立に関与し所属した。片岡が所属した政党（史党時代を除く）は、年代順に、戊申倶楽部、立憲国民党、立憲同志会、憲政会、立憲民政党である。特に、同志会、憲政会が政友会に次ぐ第2党として

発展していくうえでの片岡の功績は少なくない。本節では、戊申倶楽部から憲政会に至るまでの片岡の各政党組織における活動について考察していく。

明治41 (1908) 年、第10回総選挙で三重から選出された片岡は、当選直後に仙石らと共に無所属議員を糾合して戊申倶楽部を結成して所属した。戊申倶楽部は市部選出で実業家出身の議員が多く所属する会派で、財政整理、国債返還、産業発達などを綱領に掲げていた。片岡は明治37 (1904) 年の百三十銀行の救済⁸⁰⁾、明治38 (1905) 年の鉄道抵当法の制定⁸¹⁾、明治39 (1906) 年の鉄道国有法施行の際の買収価格の折衝などを通じて桂太郎と接点を持っており⁸²⁾、その際に桂の政治的力量に深く感銘を受け、それ以来一貫して桂太郎内閣を支持していた。しかし、そのことが戊申倶楽部内の足並みを乱すことになる。例えば、明治41 (1908) 年末に戊申倶楽部の幹事選定にあたって片岡の名前が上がったものの、片岡が入れば戊申倶楽部が桂内閣に接近すると世間からみなされる恐れがあるとして見送られていた⁸³⁾。

そうした経緯もあって、結成からわずか2年後の明治43 (1910) 年に戊申倶楽部は解党され、大同倶楽部と合流して中央倶楽部が作られることになった。戊申倶楽部議員の大半が中央倶楽部に流れたのに対し、片岡は中央倶楽部への参加を見送った。代わりに、片岡は仙谷、和田尊義、富田幸次郎ら「三菱系土佐派」の一員として、憲政本党内の犬養毅 (政友会寄り) に対立する同郷の大石正巳 (桂太郎寄り) の勢力拡大に努めることになる。彼は両者の融和を図りながら立憲国民党の結党に創立委員として貢献した。党内では会計監督として金銭面で党に貢献し⁸⁴⁾、国民党本部の新築費を多く負担したり⁸⁵⁾、選挙費用を片岡自身が肩代わりしたりするなど党財政の一翼を担った⁸⁶⁾。大石、片岡らの一派は「国民党土佐派」として知られ、一貫して桂内閣を支持し続けた。国民党には、民党の伝統を守って政友会とともに政府との対立姿勢を鮮明にする犬養ら非改革派 (純民派) と、政府との妥協を図る片岡、大石ら改革派 (官僚派、土佐派) が対立しており、両者の反駁は党の選挙運動にも悪影響を及ぼすほどだった。両者の摩擦が最も激化したのは明治44 (1911) 年の鉄道広軌法案をめぐる政局の際である。片岡はこのとき、仙谷と共に鉄道広軌法案を後藤新平鉄道院総裁ら桂系官僚と協力しながら帝国議会で提出したが、政友会に加え犬養ら非改革派の反対にもあい、結局鉄道広軌法案は国民党内で棄却となった。この時代の帝国議会は政友会が専ら優勢で、国民党はこのように改革派と非改革派による内部抗争が絶えなかった。

大正2 (1913) 年頃になると、国民党内の改革派と非改革派の派閥争いは極地

に至り、ついに反政友会を掲げる桂新党の創立に片岡が協力したため、政友会に協力姿勢を示す改革派の犬養によって片岡は除名され、片岡を含む国民党改革派は立憲国民党を脱党する。その後も片岡は政友会・国民党による憲政擁護運動に対抗し、桂内閣を擁護するため、大石、富田、仙石らとともに立憲同志会の創立に尽力した⁸⁷⁾。

大正2(1913)年末に立憲同志会が創立され、初代総理には片岡とも良好な関係を持つ加藤高明が就任した。同志会内では間もなく片岡ら幹部派と添田飛雄太郎ら非幹部派の派閥争いが起こった。片岡は幹部派の一員として会計監督、相談役、院内総務を兼務し、党内事情に通じていない加藤総理を補佐しながら党運営を主導したため、しばしば非幹部派の激昂を招いていた⁸⁸⁾。

一方で、片岡が政治的な功績の実現に貢献したという事実も指摘しておかなければならない。彼は第2次大隈内閣末期、加藤高明の総理就任を望んでいたが、加藤は元老・山縣有朋との関係が悪く、そのことが加藤の総理就任の障害の1つとなっていた。そこで片岡は、山縣と親交のある三浦梧楼枢密顧問官に仲裁を委ねるべく三浦と交渉した⁸⁹⁾。京都で行われた大正天皇即位の礼の際には、片岡の京都桃山の本邸に加藤・三浦を招き両者の友好関係を作るのに尽力した⁹⁰⁾。この直前、加藤は第2次大隈重信内閣で外務大臣を務めていたが、その際中国に対して突きつけた21か条要求によって引き起こされた外交上の混乱の責任をとって外相を辞職しており、この会談はかねてから加藤に批判的であった三浦の加藤に対する不信を解くことにも繋がった。三浦の斡旋の結果、大正5(1916)年には加藤、原、犬養の3党首会談が行われ、さらに大正13(1924)年には片岡が念願した加藤高明内閣が成立した。この実現に片岡の果たした政治的役割は大きかったというべきであろう。

また、加藤小太郎や山口俊一、そして都ホテル常務取締役で、片岡の側近の岸田勉らとともに、同志会の京都支部の開設にも取り組んだ⁹¹⁾。第2次大隈内閣は元老の山縣有朋から不信を買い、その後継内閣に注目が集められていた。同志会は加藤高明を、山縣は寺内正毅を推しており、両者は激しく対立していた。同志会は加藤内閣樹立に向けて、同志会、中正会、公友倶楽部の合同を実現することで勢力拡張を図る必要があった。片岡が進める同志会京都支部の開設は、これら3党の協同関係を示すことができるかという点で、この政局下では極めて重要な意味を持っていた。特に、尾崎行雄を中心とする中正会は京都において同志会と同等の勢力を有し、合同後の新党経営をめぐる同志会側に対抗しようとしてい

たため、調整は難航するものと思われた。しかし、京都の中正会議員3名のうち、のちに片岡とはライバル同士になる森田茂は片岡とは同じ高知出身で、川崎安之助は片岡が監査役を務めていた京津電気軌道株式会社で監査役を務めており⁹²⁾、片岡にとって合同に向けた折衝は比較的進めやすかった。それゆえ、京都の中正会議員からはさしたる反発もないまま同志会京都支部の開設は無事に実現し、片岡が支部長に選任された。発会式には1200名以上の党員が参加し、加藤、若槻、濱口、安達などの幹部も列席し、終了後には片岡の経営する都ホテルで懇親会が催された⁹³⁾。

片岡は大正5(1916)年には同志会総務委員に就任し、府会議員選挙の指揮や伏見町長候補の人選をめぐる調停に取り組むなど党務に精励した⁹⁴⁾。同年、同志会・中正会・公友倶楽部が合同して憲政会が発足したことで、翌年に憲政会京都支部が発会し、片岡が引き続き支部長に選任された⁹⁵⁾。大正8(1919)年に寺内内閣が崩壊し、原敬内閣が成立して政党政治が活発化すると、片岡は約16年務めた日本生命社長を辞任し、以降政治活動により一層専念するようになる。このとき片岡は、「年来の宿志」を実行するため「三度の飯より好きな」政治活動に専心したい、と抱負を述べている⁹⁶⁾。

Ⅲ 政界復帰と公職の歴任

本章では、片岡が政治家人生の後半期(1920-1934年)においてどのような活躍をしたのかを考察する。第1節では、不本意な落選から政界復帰までの活動を、選挙運動のあり方を中心に明らかにする。第2節では、商工大臣、大蔵大臣と公職を歴任していく過程で、どのような功績を収めたのか確認する。第3節では、「失言」後の政治力の凋落と晩年の動向について述べる。

1 落選と復帰

片岡は大正8(1919)年に日本生命社長を退任して以降、政治活動を本格化させた。しかしその矢先、大正9(1920)年に行われた第14回総選挙で片岡は落選してしまう。この選挙は小選挙区制が導入されて初めて行われた総選挙であったが、片岡がそれまで京都において地盤としてきた南山城や丹後は、それぞれ京都4区、同7区に区分された。しかし片岡は、これらの選挙区ではなく、京都2区(下京区)からの立候補を模索し始めた。片岡が従来の地盤である4区や7区か

らの立候補を見送った理由は明確ではないものの、先述したように片岡は以前から京都市部からの立候補を強く望んでおり、小選挙区制の導入を機に市部からの初出馬を目指していたのではないと思われる。当時、京都2区からは元衆議院議長の奥繁三郎（政友会）、京都市助役の鷺野米太郎らが立候補する見込みが報じられていた⁹⁷⁾。同区において、従来から京都に地盤を持つ奥や鷺野が片岡にとって強敵に感じられたことは確かであろう。しかし、両者とも憲政会の候補ではなく、また同区は小選挙区制下においても特例で定数2とされていたのであり、憲政会の公認を既に得ていた片岡にとって、この構図は決して悲観的なものではなかった。しかし片岡は、京都からの出馬では当選が困難であると考え、京都2区の公認候補決定を振り切り、当時有力とはみなされていなかった初出馬の国沢新兵衛（政友会）が立候補していた地元の高知4区（片岡の郷里・高岡郡が位置していた）から立候補したのである。この判断は片岡にとっては悪手というべきものであった。2区から立候補すると思われていた奥は結局5区からの出馬となり、2区からは憲政会候補の奥村安太郎が出馬して当選したのである。しかも、京都の憲政会候補の応援に力を注がざるを得なくなった結果⁹⁸⁾、片岡は肝心の高知4区での選挙活動には手が回らず、さらに第14回総選挙は当時原敬が総裁を務めていた与党政友会に追い風が吹く中での選挙であったため、片岡は政友会の国沢に敗北した⁹⁹⁾。京都における事情からも推察されるように、当初の予定通り京都2区から立候補していれば片岡が当選した可能性も高かったと見られており、『京都日出新聞』は「同志の為、憲政会の為、惜しまれる」と評した¹⁰⁰⁾。

一方、高知では政友会から「吏党の毒手」などと称され、片岡陣営が対立候補の陣営に対して石をなげつけたりするなどの選挙干渉を行ったことや、寄付金で村民を誘惑したりしたことなどが報じられた¹⁰¹⁾。演説会では、片岡がかつて選挙干渉を行ったことを引き合いに、「(明治)二十五年を忘れたか」、「破憲の元凶」などの罵声が飛んだという¹⁰²⁾。

片岡は落選中、京都市会選挙での憲政会候補の応援などにも努めたが、やはり地方政界への影響力は限定的であった¹⁰³⁾。この間、片岡は党の総務委員や顧問として加藤総裁に従って地方に遊説し、また党内で兵站部の任務に参加するなどした¹⁰⁴⁾。片岡の落選中の憲政会は政治資金が不足しており、そのため加藤が拠出した資金も巨額に上り、出金を躊躇う加藤から金を引き出す役目も副総裁の若槻禮次郎と共にこなした¹⁰⁵⁾。また、地方選挙などでは候補者に資金力が乏しいことも多く、片岡自身が憲政会候補の選挙費用の全部または一部を負担すること

もよくあったという¹⁰⁶⁾。落選中には、静かに時勢の動きを観察することで経綸抱負を得たとし、大正10(1921)年に『経済組織の改革 現代組織の批判と対応策』を出版し、この論考は同年元旦から25日間にわたって大阪毎日新聞で連載された¹⁰⁷⁾。ここでは、片岡の見る日本の現状の課題と、それに対する対応策が論じられている。また、資本主義の欠陥についても触れ、資本主義は社会主義への歴史的道程であって、貧富の格差によって労資の階級闘争が激化すると資本主義は崩壊すると指摘した¹⁰⁸⁾。さらに、封建制度、資本主義経済組織、社会主義経済組織はすべて必要であり、その程度は国民生活の基調によるとも論じた¹⁰⁹⁾。明確ではないものの、片岡の見解からも社会主義さらには共産主義の歴史観を窺うことができることは興味深い。具体的な政策提言としては、食糧問題では米穀の国営化を主張し¹¹⁰⁾、教育問題については、原内閣による高等教育機関の増設は国庫負担を増大させるのみならず、知識階級の失業群を氾濫させることから批判している¹¹¹⁾。また、同時期に出版した『桃僊獅子吼集』では、普通選挙の必要性を経済問題と合わせて論じている。すなわち、労働者を生産要因の立場として考える前に、政治的要因として考える必要があり、普選によって労資を共通の立場に置くことで生産問題を解決するべきと主張した¹¹²⁾。

大正13(1924)年に貴族院を基盤に持つ清浦圭吾内閣が成立すると、憲政会・政友会・革新倶楽部による護憲3派が結成され、第2次護憲運動が展開された。同年、清浦内閣は衆議院を解散し、片岡は政界復帰を懸けて京都2区(定数2)から立候補した。同区は前回の総選挙で片岡が一旦は出馬の意向を示していた選挙区であり、京都市下京区に当たる。片岡にとっては初めての市部での選挙戦となったが、当初から優勢が報じられ、戦いを有利に進めた。京極の受楽亭で行われた演説会は鯨詰め満員となり、片岡に加え、細野辰雄陸軍予備少将などが弁士を務めた¹¹³⁾。政策面では、憲政擁護、普選実行、政党内閣確立などを掲げ、護憲運動の追い風を最大限利用した¹¹⁴⁾。選挙戦終盤に他の候補者によって八方から攻め寄せられた際には大量の印刷物を散布することで防戦し、選挙資金の豊富さを見せつけた¹¹⁵⁾。また、選挙事務所も六角会館の2階全部を充てるという豪勢ぶりであり、玄関脇には雇い切りの腕車が67台も轍を連ね、どの部屋も運動員で満員であったという。片岡は自らの選挙のみならず、憲政会全体のために選挙費用として10万円を党に提供したと伝えられている¹¹⁶⁾。前述したように、片岡は当初から優勢を報じられていたが、前回の選挙で不本意な落選を経験したこともあり、低姿勢な面を印象付けることも忘れなかった。投票日1週間前には、それ

までの有権者の同情に丁寧に感謝したうえで、他候補により四方八方から攻撃を受けていることを強調し、さらなる同情を求める新聞広告を掲載した¹¹⁷⁾。また、片岡のこの選挙での配布用チラシには、「諸君！私の晩年の事業を援けて下さい」という文言が書かれ¹¹⁸⁾、世代交代を匂わせつつ有権者の情に訴えた。こうした選挙運動の結果、片岡は次点の田崎信蔵の2倍以上の票を獲得してトップ当選を果たし¹¹⁹⁾、政界に復帰した。ちなみにこの選挙では、直温の婿養子・片岡安も憲政会から京都5区で立候補し、地方有志の支持を得ながら善戦したが¹²⁰⁾、政友会の木戸豊吉に敗北している。

2 公職の歴任

政界復帰を果たした片岡は、加藤高明内閣以降、内務政務次官、商工大臣、大蔵大臣と公職を歴任していく。一般的には大蔵大臣在任中の「失言」について注目されることが多いが、本節ではその他の片岡の功績についても紹介していきたい。また、金融恐慌に至るまでの経緯について、片岡が晩年にどのように解説したのかについても紹介する。

大正13(1924)年に行われた第15回総選挙において護憲3派が勝利し、第1次加藤高明内閣が発足する。片岡は行財政税制に関する特別委員等を経て、内務政務次官に就任した。就任にあたり、兄・直輝をはじめ周囲は長年政界にいて今更政務次官などでもあるまいと反対したが¹²¹⁾、片岡は就任を引き受けた。連立政権ゆえに憲政会の閣僚ポストにも限りがあったことで大臣になれなかった党幹部の不満が、長年政界にいる片岡が政務次官を文句も言わずに引き受けたとなれば少しは緩和する、というのが片岡の考えであった¹²²⁾。しかし、大臣に任ぜられなかった不服から「(首相の)加藤君とは此頃一度も会わぬ」と公言したこともあった¹²³⁾。内務省では従来の官僚式の遣り方を一掃すべく政務を補佐し、普通選挙法の制定などに取り組んだ。その様子について貴族院議員だった永田秀次郎は、そのリーダーシップを称え、片岡が事実上の内務大臣であると評した¹²⁴⁾。一方で、そうした態度について、「云ふことだけはいつも大きい」¹²⁵⁾、「尊大狂」¹²⁶⁾、「威張り臭った態度」¹²⁷⁾などと新聞等から揶揄されることも多かった。

大正14(1925)年、片岡は第2次加藤高明内閣で商工大臣に就任する。初訓示では、官僚気質を離れて敏速かつ親切に事務を処理するよう訓示した¹²⁸⁾。片岡は14か月の商工大臣在任中、様々な課題に果敢に取り組んだ。

まず、懸案だった八幡製鉄所の経営問題については、民営化のための準備とし

て八幡製鉄所の営業状態を民間と同レベルにするべく改革を行った。片岡は「役所の金は無利子であるので役人の頭に利子の観念が全然ない」と指摘し¹²⁹⁾、当時政府一般会計から豊富に支出されていた八幡製鉄所の資金を特別会計に移して独立させ、自給自足の会計を樹立することで民間企業に近い経営方法にした¹³⁰⁾。こうした政策の実行は、長く実業界において多くの企業経営に関わった片岡らしい行動とってよいだろう。

染料工業の発展のための日独交渉にも片岡は大きく貢献した。染料工業は、その色素であるコールタールの製造過程で生成される化学物質が爆薬、毒ガスの製造に有用であることから、有事の際には軍事工業としても活躍しう特徴があった。第1次世界大戦で登場した化学兵器の威力を目の当たりにした欧米各国は、染料工業の保護・育成に取り組み始めており、片岡も同様の問題意識を持っていた。片岡の商工大臣在任中、日本は染料について高い国際競争力を持っていたドイツと通商条約を結ぶべき時期を迎えていた。片岡は外務省とも協力しながら交渉を進め、染料協定に関する紳士協約案を作成した。また、米国などドイツ以外の国からの染料輸入についても制限をかけることで、日本の染料産業の保護を図った¹³¹⁾。これにより、日独通商条約締結の癌となっていた染料問題は片岡の尽力により解決され¹³²⁾、日本の染料工業の発展に道筋をつけた。

片岡が商工大臣在任中、最も力を入れて取り組んだ課題といえば、国産奨励問題が挙げられる。第1次世界大戦後、特に関東大震災後の巨額の輸入超過による海外への大量の正貨流出を阻止するため、大正14(1925)年に6大商工団体などによって国産品振興運動が起こされたのである。片岡は商工大臣として数多くの経済系メディアに登場し¹³³⁾、国民に対して国産品の使用を呼び掛けた。自らが会長を務める国産振興委員会の発足に際しては、「外国品に対する偏愛偏重の悪風を是正し度い」と抱負を述べている¹³⁴⁾。さらに、英米品の圧迫を受けていたソーダ灰製造工業に対しては補助金を交付することで品質を改良させ、国内市場から外国製品を駆逐させるなどの成果を得た¹³⁵⁾。

生命保険業に関しては、かつて日本生命社長を務めた経験を活かして、当時の日本の実情に合っていなかった生命保険死亡表を改正し、新たに商工省日本保険生命表を策定した。また、経営状況に問題があるとして、八千代生命保険、有隣生命保険の検査を命じるなど¹³⁶⁾、健全な保険経営に向けて取り締まりも強化した。さらに、保険行政が商工省の一課の所属として取り扱われていたのを昇格させ、勅任の保険部長を創設する計画も立案し、これは後に実現することとなっ

た¹³⁷⁾。

大正15(1926)年、第1次若槻礼次郎内閣が発足し、片岡は大蔵大臣に就任する。在任中は、財政再建のためにデフレーション政策を行い、金解禁のための準備に注力した。また、金融機関が放漫な経営を行っていることを問題視し、金融制度調査会を通じて銀行法案を取りまとめ、第52議会において成立させた。

震災手形問題に関しては、震災手形損失補償公債法案のほか、片岡自身が経験した保険の原理を応用して作り上げた震災手形善後処理法案を成立させた。この際、成立が危ぶまれることを事前に不安視した片岡は、法案提出の直前、清水辰三郎を介して田中義一と密かに会談し、法案審議に関して田中に相談している。田中は法案の必要性を了解し、党内を纏めるよう約束したが、法案採決の間際に憲政会と政友本党との間に政策連盟成立の報が伝えられ、これを知った政友会が態度を急変させた。片岡はこの事実を法案通過までは秘密にしておくよう両党幹部に依頼していたが、政友本党の松田源治が悪意なく新聞記者に語ったことで暴露された¹³⁸⁾。その結果、政友会はこの法案に反対する姿勢に転じ、その過激な言動が財界を刺激した。その結果、取り付け騒ぎや銀行の倒産が引き起こされ、経済は大混乱となった。

その後の衆議院予算委員会において、片岡が一連の経済混乱の中で東京渡辺銀行が支払い停止に至ったという報告を受けたことに言及してしまう。これが金融恐慌を引き起こしたとされる「失言」である。このことに関して片岡は晩年、次のように釈明している。すなわち、委員会における発言は東京渡辺銀行の営業時間を過ぎ去った後に発言したものであり、監督している官庁に銀行側から届け出があったことに関して公にすることは問題ない。また、大蔵省に報告に来た渡辺治右衛門に対しても大蔵次官は本日発表する旨を伝えていた¹³⁹⁾。しかし、片岡のこの説明は「失言」として議会でも厳しい批判を受けることになった。東京渡辺銀行が休業するや、取り付け騒ぎは全国に広がり金融恐慌を引き起こすに至ったからである。金融恐慌によって最も窮地に陥った台湾銀行に対する特別融通の緊急勅令が枢密院に諮問されたが、枢密院はこれを否決し、これを受けて台湾銀行は休業した。この責任をとって若槻内閣は昭和2(1927)年に総辞職し、片岡も大蔵大臣を辞することになる。

3 政治力の凋落と晩年

昭和3(1928)年、中選挙区制が導入されて初めての衆議院議員総選挙が行われ、

片岡は憲政会の後身である立憲民政党の公認で京都1区(定数5)から立候補する。中選挙区制下での京都1区は小選挙区制下の京都2区(下京区)に上京区を加えた選挙区であり、同党は当初、片岡を含む3人の公認候補を立てていた。しかし、これに不服を持った中村三之丞(片岡が大蔵大臣時の秘書官)が立候補を強行したため、結局4人の民政党候補が乱立することになった。民政党からの当選者は片岡と元京都市長の森田茂(高知出身)の2人とどまり、残りの中村と西村金三郎は相討ちとなって両者とも落選した¹⁴⁰⁾。元市議の西村は宇治・伊勢田を地盤としており、市部からの出馬には苦勞したと思われるが、予定通り中村が出馬を見送っていたならば、中村が獲得した4000票余りを本来は西村が得票することで当選し、民政党からは3人の当選者を出すことができるはずだった。そうした点から、かつての秘書官の立候補を止めることができなかつた片岡の失態は明らかであった。さらに、満鉄総裁の候補として片岡の名が挙がった際にも、「失言」の経緯から片岡の就任を不安視する声が強くなり、結局見送られた。このように、金融恐慌を引き起こした「失言」によって、片岡の政治力は凋落の兆しを見せ始めていた。

昭和5(1930)年、第17回総選挙において片岡は再び京都1区(定数5)から出馬したが、同総選挙では民政党に追い風が吹いたにもかかわらず、片岡はわずか130票差の次点に泣き落選してしまった¹⁴¹⁾。京都1区は前回に引き続いての激戦区であった。元京都市長の安田耕之助が初出馬を果たしたことで民政党候補がまたも4人乱立することになり、これが片岡の票を大きく減らす原因となった。片岡は第15、16回総選挙を通じて下京区を中心に京都市部において着実に地盤を築いていたが、京都市内に強固な支持基盤を持つ安田に片岡の票が流れたのである。また、同選挙区に出馬していた森田も、辛うじて当選したものの片岡と同様に大きく票を減らしている。

第17回総選挙での落選を機に片岡は政界から一線を退き、昭和5(1930)年に貴族院議員に勅選された。しかし、このことで片岡と政治との関わりが全くなつたわけではなかつた。片岡は井上準之助大蔵大臣から経済問題について度々相談を受け、生命保険の国営化を助言するなどしていた¹⁴²⁾。また、浜口内閣の超緊縮財政や金解禁の方針についても、あまりに極端に及んでは良くないとの考えを持ち、従来の政策と同時に新たに産業振興策を樹立するべきとの論文を濱口首相宛に送るなどしている¹⁴³⁾。さらに、昭和5(1930)年に民政党京都支部長の川崎安之助が死去した際には、片岡が後任の支部長に就任している¹⁴⁴⁾。第2次

若槻内閣では行財政審議会委員に選任され、省廃合案に対して反対するなどしている¹⁴⁵⁾。

昭和7(1932)年の5・15事件により犬養毅内閣が崩壊したのち、斎藤実内閣が誕生するが、同内閣下では交通審議会委員を歴任し、日滿交通整備問題について、鉄道輸送、貨物の割り当てなどについて意見¹⁴⁶⁾、日滿の連繋のために尽力した。片岡は斎藤内閣成立時、政党政治が腐敗のうちに終わったことの反省から、斎藤内閣を助けるべしとの主張を一時は展開したものの¹⁴⁷⁾、晩年には、政党が早晩本来の姿を取り戻すことに期待を寄せていた¹⁴⁸⁾。

昭和8(1933)年4月に妻・祝子が死去し、同年7月以降は自身も健康不調のため一切の仕事から離れ、有馬の別荘に引き籠っていた。片岡は闘病の末、昭和9(1934)年5月21日に74歳で死去した。片岡の死去後、若槻礼次郎は片岡の正四位から従三位への昇叙を求めたが¹⁴⁹⁾、果たされることはなかった。しかし、若槻の強い働きかけもあって片岡は死去と同時に勲一等瑞宝章を授与された¹⁵⁰⁾。片岡の死去に際して、若槻は憲政会時代の苦難を回顧し、片岡の功績や党に対する貢献を讃えた¹⁵¹⁾。

結 語

片岡直温は、以下の点で悲運の多い政治家であった。すなわち、地元高知から出馬するも、政府による選挙干渉によって評判を著しく失墜させ、それ以降、地元からの出馬が難しくなり頻繁に選挙区を移動せざるを得なくなった。京都での当選可能性が高かったにもかかわらず故郷の高知から出馬して落選していることから、片岡の故郷からの出馬にはこだわりが強かったと言えよう。しかし、第2回総選挙の選挙干渉の記憶がその後長く残存し、片岡の出馬にさらに困難をもたらしたことは興味深い。

他方、片岡のビジネスでの成功は瞠目すべきものがあり、それにより形成された人脈と財力は、落下傘の輸入候補であるにもかかわらず彼に総選挙での当選の栄誉をもたらしていることから政治的資源になったことは明らかであろう。落下傘候補であっても当選することのできる強い政治力を有していたとみることできる。事実、片岡は当選6回(第2回総選挙での当選は除く)のうち、5回にわたってトップ当選を果たしており、これは片岡の実業家としての活躍や選挙運動の巧みさによるものであろう。

一方で、たった一言で経済・社会を大きく混乱させてしまった出来事は片岡の経歴に大きな傷を残すことになった。しかしながら、これらの事実を以て、片岡を、ビジネスでは成功したが政界では失態を演じた人物と評するのは早計であろう。また、金融恐慌を引き起こした「失言」についても、片岡の責任自体は免れないものの、議会における政友会の態度や、その後の枢密院の対応にも、事態を惹起・悪化させた要因があったことも事実である。また片岡は、同志会、憲政会、民政党などの発展に大きく貢献し、政党政治を擁護する姿勢をとり続け、政党政治家としての本分を全うした。片岡はビジネスで成功したと同時に、政治家としても優れた点を持った人物であったと言える。

近代日本の政治家、特に衆議院議員になるキャリアは種々あるが、実業界からの転身はその有力な1ルートであろう。片岡はその典型例と捉えることができる。そうしたタイプの人物が、政界に進出するためのハードル、選挙への出馬と当選をいかに勝ち取るか、片岡の政治遍歴はその一事例として捉えることができるであろう。

そうしたタイプの政治家が実際の政策形成にいかなる影響を及ぼすことができたのか、ここでは外形的事実だけを紹介したが、今後その内実を解き明かすことが必要である。本稿が、そうした考察のために聊かでも寄与することができれば幸いである。

- 1) 『東京日日新聞』昭和2年3月15日。
- 2) 片岡直温『回想録』(百子居文庫、昭和8年)353-374頁。
- 3) のちの高知師範学校、現在の高知大学。
- 4) 学制の発布以来、小学校の教員は師範学校で養成されることが求められていたが、師範学校卒業者だけでは人材を確保できなかったため、無資格者で代用することが多かった。このように、教員資格を持たない教員は授業生などと呼ばれた(『学制百二十年史』(文部省、平成4年)47頁)。
- 5) 前掲、片岡直温『回想録』3-24頁、410-424頁。
- 6) 同上、62頁。
- 7) 同上、52-53頁。1870年代半ば以降、内務省は全国統一の地方行政を行うべく、能力重視の人事を推進していた。特に1874年の佐賀の乱鎮圧後に同県庁内の大規模な更迭人事を行って以降、反政府の傾向が根強い「難治県」を廃することを目的に大規模な人事刷新が行われていた(清水唯一郎『近代日本の官僚 維新官僚から学歴エリートへ』(中公新書、平成25年)131-132頁)。
- 8) 前掲、片岡直温『回想録』55-56頁。伊藤は片岡について「中々確乎たる識見に

て、甚だ感服の事に御座候」と評価したという。

- 9) 清水唯一郎『政党と官僚の近代 日本における立憲統治構造の相克』（藤原書店、平成19年）19-21頁。
- 10) 『官吏改革意見書 明治七年四月』（井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝史料編第一』国学院大学図書館、昭和41年所収）。
- 11) 大津淳一郎『日本官吏任用論』（金港堂、明治14年）。
- 12) 前掲、片岡直温『回想録』107-109頁。
- 13) 同上、25-70頁。
- 14) 『竜門雑誌』第127号（竜門社、明治31年）22-34頁。
- 15) 前掲、片岡直温『回想録』118-120頁。
- 16) 『日本人名大辞典』（講談社、平成13年）。
- 17) 前掲、片岡直温『回想録』150頁。
- 18) 片岡の回想によると、片岡は以前から中井の気ままな性格や気の変わり様の激しさに面倒を感じており、しばしば中井の意向を受け付けられないこともあった。新規規程施行の際にも、片岡は中井の出張の間に自分が施行を主導することで、仮に反対派によって施行が失敗させられたとしても中井の責任が問われないようにし、成功した場合には中井の手柄にする約束することで中井を懐柔した（前掲、片岡直温『回想録』143-147頁）。
- 19) 前掲、片岡直温『回想録』70-71頁。
- 20) 『読売新聞』大正13年 8月15日。
- 21) 『日本生命百年史』上巻（日本生命相互保険会社、平成4年）45-48頁。
- 22) 同上、49-66頁。
- 23) 表 各候補者の得票数（当選者／落選者、以下同じ）。林有造（自由倶楽部）1323票、片岡健吉（自由倶楽部）1297票／弘田正郎（国民自由党）856票、片岡直温（国民自由党）830票。
- 24) 『毎日新聞』明治25年 1月26日。
- 25) 末木孝典『立憲政治と選挙干渉』（慶應義塾大学出版会、平成30年）62頁。
- 26) 同上、71-72頁。
- 27) 片岡直温（国民自由党）854票、安岡雄吉（国民自由党）844票／片岡健吉（自由党）779票、林有造（自由党）773票。
- 28) 『官報』—第三回帝國議会議院議事速記録第七号（内閣官報局、明治25年 5月15日）136-140頁。
- 29) 片岡直温『大正昭和政治史の一断面』（西川百子居文庫、昭和9年）、743-745頁。
- 30) 川口清栄『政機線上之人物 一名・代議士人物評』（現代社、明治42年）122頁。
- 31) 再集計後の各候補者の得票数は以下の通り。片岡健吉（自由党）879票、林有造（自由党）875票／片岡直温（国民自由党）746票、安岡雄吉（国民自由党）742票。
- 32) 林有造（立憲自由党）1128票、片岡健吉（立憲自由党）1126票／片岡直温（国民協会）428票、弘田正郎（国民協会）426票、大西正義 3票。
- 33) 『東京日日新聞』明治27年 1月20日。

- 34) 林有造 (立憲自由党) 1153票、片岡健吉 (立憲自由党) 1146票／片岡直温 (立憲自由党) 400票、弘田正郎 (国民協会) 395票、安岡雄吉 (国民協会) 8票。
- 35) 『東京日日新聞』明治31年1月30日。
- 36) 『三和銀行の歴史』(三和銀行行史編纂室、昭和49年) 42-46頁。
- 37) 石川辰一郎『片岡直輝翁記念誌』(石川辰一郎、昭和3年) 118、135頁。
- 38) 『東京日日新聞』明治31年1月26日。
- 39) 吉本義秋、鶴崎熊吉『大阪人物小観』(吉本義秋、明治36年) 98頁。
- 40) 『東京日日新聞』明治31年3月16日。
- 41) 片岡直温 (山下倶楽部) 420票／菊池侃二 (立憲自由党) 306票。
- 42) 『議會制度百年史 院内会派編衆議院の部』(衆議院、平成8年) 80頁。
- 43) 前掲、片岡直温『回想録』200-211頁。
- 44) 前掲、片岡直温『回想録』200-211頁。
- 45) 明治30年の第十回通常議會中に日清戦争後の戦後経営に関する政府の提案を支持する趣旨を以て組織された衆議院内会派で、実業派議員が多く所属した(前掲、『議會制度百年史』73頁、青野権右衛門『日本政党変遷史』(安久社、昭和10年) 314頁)。
- 46) 伊藤徳三 (憲政党) 796票／片岡直温 (実業同士倶楽部) 36票。
- 47) 前掲、『日本生命百年史』上巻185-460頁。
- 48) 前掲、片岡直温『回想録』83-86頁。
- 49) 『東京日日新聞』明治35年6月28日。
- 50) 前掲、『日本生命百年史』上巻84-101頁。
- 51) 同上、392-397頁。
- 52) 小川功「関西鉄道の国有化反対運動の再評価—片岡直温の所論紹介」(『運輸と経済』42巻10号、昭和57年10月)。
- 53) 前掲、片岡直温『回想録』315頁。
- 54) 『伊勢新聞』明治41年5月5日。
- 55) 『伊勢新聞』明治41年5月12日。
- 56) 栗原亮一 (政友) 6598票、片岡直温 (無所属) 5600票、尾崎行雄 (猶興会) 5116票、浜田国松 (猶興会) 4424票、大井ト新 (政友) 4275票、中村豊次郎 (無所属) 4118票、森茂生 (政友) 3075票／川村曄 (政友) 2664票、辻寛 (政友) 2617票。
- 57) 『伊勢新聞』明治41年5月11日。
- 58) 『読売新聞』明治41年5月5日。大石は第6回総選挙で三重4区(飯高郡、飯野郡、多気郡)、第7回総選挙で三重郡部から出馬した経歴がある。
- 59) 『伊勢新聞』明治41年5月12日。
- 60) 前掲、片岡直温『回想録』269-270頁。
- 61) 『京都日出新聞』明治45年2月28日、4月6日、8月14日。
- 62) 前掲、片岡直温『回想録』315、318頁。
- 63) 『土陽新聞』明治45年5月1日。

- 64) 同上。
- 65) 『土陽新聞』明治45年5月5日。
- 66) 片岡直温（国民党）2748票、白石直治（政友）2667票、富田幸次郎（国民党）2296票、大石正巳（国民党）2131票、岡田栄（政友）2109票／土居貞弥（政友）1403票、安芸喜代香（無所属）517票、山口兼良97票。
- 67) 『都ホテル100年史』（株式会社都ホテル、平成元年）33-35頁。
- 68) 『京都日出新聞』大正2年12月6日。
- 69) 『京都日出新聞』大正2年12月6日（片岡直温談）。
- 70) 『京都日出新聞』大正2年11月12日。
- 71) 『東京日日新聞』明治42年9月20日。
- 72) 『京都日出新聞』大正9年2月29日。
- 73) 『京都日出新聞』大正4年2月6日、3月11日。
- 74) 片岡直温（同志会）4581票、川崎安之助（中正会）3353票、山口俊一（同志会）3268票、津原武（中正会）2939票、野尻岩次郎（政友）2872票／牧野充安（国民党）2472票、奥繫三郎（政友）2417票（以下略）。
- 75) 片岡直温（憲政会）4002票、長田桃蔵（政友）3741票、神谷卓男（無所属）3461票、川崎安之助（憲政会）2800票、山口俊一（憲政会）2635票／木戸豊吉（政友）2560票、津原武（憲政会）2496票、木村良（無所属）1328票。
- 76) 『京都日出新聞』大正6年2月1日。
- 77) 前田蓮山『政治は人格なり』（新作社、大正13年）196頁。
- 78) 山浦貫一『政局を繞る人々』（四海書房、大正15年）149頁。
- 79) 『東京日日新聞』明治44年1月7日。
- 80) 前掲、片岡直温『回想録』288頁。
- 81) 同上、282-284頁。
- 82) 同上、289-290頁。
- 83) 『東京日日新聞』明治41年12月10日。
- 84) 『読売新聞』明治43年3月10日。
- 85) 『東京日日新聞』明治43年8月3日。
- 86) 『東京日日新聞』明治45年3月25日。
- 87) 櫻井良樹編『立憲同志会資料集』4巻（柏書房、平成3年）。
- 88) 『東京日日新聞』大正3年2月28日。
- 89) 三浦梧楼『観樹將軍回顧録』（政教社、大正14年）522頁。
- 90) 前掲、片岡『大正昭和政治史の一断面』128-132頁、熊田葦城『観樹將軍縦横談』（実業之日本社、大正13年）265-267頁、原奎一郎編『原敬日記』4巻（福村出版、昭和40年）1915年11月19日。
- 91) 『京都日出新聞』大正5年4月10日、21日。
- 92) 『代議士詳覧』（泰山堂、大正13年）383頁。
- 93) 『東京日日新聞』大正5年5月8日。
- 94) 『京都日出新聞』大正4年8月23日、26日、27日、大正5年5月26日。

- 95) 『京都日出新聞』大正6年1月18日。
- 96) 前掲、片岡直温『回想録』269-270頁。
- 97) 『京都日出新聞』大正9年4月1日、3日。
- 98) 『京都日出新聞』大正9年4月7日。
- 99) 国沢新兵衛(政友)3425票/片岡直温(憲政会)2187票。
- 100) 『京都日出新聞』大正9年5月14日。
- 101) 『土陽新聞』大正9年5月2日。
- 102) 『土陽新聞』大正9年5月4日。
- 103) 『京都日出新聞』大正10年5月19日。
- 104) 前掲、片岡『大正昭和政治史の一断面』310-311頁。
- 105) 同上、335-337頁。
- 106) 同上、337-338頁。
- 107) 『大阪毎日新聞』大正10年1月1日-1月25日。
- 108) 片岡直温『経済組織の改革』(片岡直温、大正10年)79頁。
- 109) 同上、78頁。
- 110) 同上、118-119頁。
- 111) 同上、120頁。
- 112) 片岡直温『桃僊獅子吼集』(竜潜窟、大正10年)64頁。
- 113) 『京都日出新聞』大正13年5月9日。
- 114) 『京都日出新聞』大正13年5月1日。
- 115) 『京都日出新聞』大正13年5月9日。
- 116) 『京都日出新聞』大正13年3月23日。
- 117) 『京都日出新聞』大正13年5月3日。
- 118) 『京都日出新聞』大正13年5月9日。
- 119) 片岡直温(憲政会)5787票、田崎信藏(革新倶楽部)2891票/八木伊三郎(無所属)2439票、鈴木吉之助(政友)992票、西彦太郎(無所属)786票。
- 120) 『京都日出新聞』大正13年5月3日。
- 121) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』362頁。
- 122) 同上、363頁。
- 123) 『読売新聞』大正13年9月13日。
- 124) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』364頁。
- 125) 『読売新聞』大正14年5月15日。
- 126) 『読売新聞』大正14年1月13日。
- 127) 『読売新聞』大正14年1月19日。
- 128) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』367-368頁。
- 129) 『読売新聞』大正14年9月5日(片岡直温談)。
- 130) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』375-382頁。
- 131) 『東京日日新聞』大正14年8月25日。
- 132) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』、393-407頁。

- 133) 『鉄工造船時報』第11巻第1号(鉄工造船時報社、大正15年1月)7頁、『保険銀行時報』第29年新年号(保険銀行時報社、大正15年1月)11頁、『工政』1926年2月号(工政会、大正15年2月)57-65頁、『実業』(実業社、大正15年7月)1頁、『大阪之工芸』第2巻第16号(大阪金物新報社、大正15年8月)2-6頁。
- 134) 『東京日日新聞』大正14年12月18日(片岡直温談)。
- 135) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』439-446頁。
- 136) 『東京日日新聞』大正14年10月23日、11月27日。
- 137) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』427-438頁。
- 138) 同上、422-538頁。
- 139) 同上、570-574頁。
- 140) 片岡直温(民政)17507票、森田茂(民政)13158票、田崎信蔵(革新党)9036票、水谷長三郎(労農)8781票、鈴木吉之助(政友)8227票/鷺野米太郎(実業同志会)7754票、西村金三郎(民政)6156票、中村三之丞(民政)4147票(以下略)。
- 141) 安田耕之助(民政)23529票、西村金三郎(民政)17200票、鷺野米太郎(国民同志会)10433票、鈴木吉之助(政友)9484票、森田茂(民政)8768票/片岡直温(民政)8638票、河上肇(労農)7255票。
- 142) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』725-728頁。
- 143) 同上、715-724頁。
- 144) 『京都日出新聞』昭和5年1月17日。
- 145) 『東京朝日新聞』昭和6年7月29日。
- 146) 『読売新聞』昭和8年9月26日。
- 147) 前掲、片岡直温『大正昭和政治史の一断面』733-734頁。
- 148) 同上、750頁。
- 149) 『齋藤実文書』(国立国会図書館所蔵)昭和9年11月27日付齋藤実宛若槻礼次郎書翰。
- 150) 『東京朝日新聞』昭和9年5月22日。
- 151) 『京都日出新聞』昭和9年5月22日。